

●井上さんの書籍紹介

「たとへば君 四十年の恋歌」
河野裕子 永田和宏著 文藝春秋 2011年7月初版

はじめに

『手をのべて あなたとあなたに触れたきに 息が足りないこの世の息が (裕子絶筆)

歌は遺り歌に私は泣くだらう いつか来る日のいつかを怖る (和宏)

乳癌で逝った妻とすべてを見届けた夫 二十一歳の出会いから死の直前まで 歌人夫妻が紡いだ380首とエッセイ』

この、新聞に載っていた新刊の広告が、本書との出会いであり、すぐに求めた。この2つの歌でも私には十二分であったが、河野、永田先生には失礼な言い方であるが、読み終えると、羨望と嫉妬を覚えた。今回は本書を紹介する。



著者の紹介

河野裕子

昭和21年熊本県生まれ。大学在学中に第15回角川短歌賞受賞。平成14年「歩く」で若山牧水賞および紫式部文学賞、平成21年「母系」で斎藤茂吉短歌文学賞および迢空賞受賞。宮中歌会始詠進歌選者。平成22年8月12日、乳癌のため死去。64歳。

永田和宏

昭和22年滋賀県生まれ。京都大学再生医科学研究所教授などを経て、現在、京都産業大学総合生命科学部部長。平成16年「風位」で芸術選奨文部科学大臣賞および迢空賞受賞。平成21年紫綬褒章受章。「塔」短歌会主宰。宮中歌会始詠進歌選者。

河野裕子先生の病歴

2000年9月左乳がん発症。手術。リンパ節への転移があり、ステージはⅡとⅢの間。2008年7月に再発。2010年7月7日よりご自宅にて療養。8月12日永眠された。例年になく暑い夏。蝉声が沁み入るような夏の日であった。

本書の内容・感想

最初は、題名の「たとへば君」を理解することができなかったが、今は、永田先生を越えて、私に呼びかけているような気がする。これは、河野先生が21歳、お二人が出会われた頃、詠まれた歌の起句である。詳しくは本書に譲るとして。

『たとへば君 ガサッと落葉すくふやうに私をさらって行つてはくれぬか』

本書は7章から成り立っている。出会いから結婚・出産、若き日々、アメリカ留学中のこと、多忙な日常、発病、再発、絶筆。時系列で、歌、エッセイがまとめられている。今回は、後半部分、発病以降をとりあげる。

初診時、診察医より告知を受けて。9月22日。
『まつ黒いリンパ節三つと乳腺の影、悪性ですとひと言に言ふ』
『さうなのか癌だったのかエコー見れば全摘ならむリンパ節に転移』
そして、病院でご主人とお会いになる時。
『何といふ顔してわれを見るものか私はここよ吊り橋ぢやない』

8年が過ぎ、ようやく、もう大丈夫と思いはじめていた矢先、転移を告げられた。
『まぎれなく転移箇所は三つありいよいよ来ましたかと主治医に言へり』
『大泣きをしてあるところへ帰りきてあなたは黙って背を撫でくるる』

辞世の歌はどのようにして生まれたのだろうか。本書より抄出する。
「2010年。抗癌剤の効果を見きわめるため、最後に京大病院に入院したのは6月。そして退院したのは7月7日、七夕の日であった。もうこれ以上使える抗癌剤はない。
私自身は、どうしても、日常の生活の中で、河野裕子の最期の日々を共にしたかった。私たちが普通の生活をしている、その横に河野が臥せっている、そんな形で彼女に寄り添っていたかった。

8月11日。いよいよ裕子の状態が悪い。汗をかき、「苦しい、どうにかして」から、「もう死なせて」に変わる。

私たち家族の青春時代の、あの楽しい記憶に包まれて眠ってくれただろうか。

1時間ほども眠ったあと、ベッドの両側から見つめている私たちに気付いたようだ。不思議そうに眺めて、呟くようにゆっくり、かろうじて聞き取れるほどの小さな声で話し始めた。

『あなたらの気持ちがこんなにわかるのに言ひ残すことの何ぞ少なき』

一首ができる、言葉が次々に芽づるのように口にのぼってくるようだ。十分ほどの間に、数首ができた。最後の一首は。

『手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が』

こんな風にして河野裕子は死の前日まで歌を作った。生まれながらの歌人だったのだと思う。

翌12日。やはり苦しみの発作の直後に、『われは忘れず』と呟いた。「それから？」と促すと、「うん、もうこれでいい」と言った。それが歌人河野裕子との別れであった。」

最後の歌、そして、他の歌も、多くの人の心の底の琴線に共鳴すると思う。門外漢の私もそうであったように。是非、皆様に読んでいただきたい。

会員 井上 林太郎